祈りのパレスチナ絵画展　2024 年 3 月築地

長沢美抄子（中東文化研究家）

この新年に私は一つの決心をした。「よし！これまで集めてきたパレスチナ人画家の作品の展覧会をいまこそ開かねば」と。パレスチナの真実を知ってもらうためにという使命感に駆り立てられた。こうして、築地のギャラリー（うおがし銘茶・木の実倶楽部）で 3 月に『中東の絵画に見る一筋の希望』と題する絵画展を開催することになった。

昨年の秋から始まったガザでの民族浄化はこの絵画展開催の 3 月で６カ月目に入ろうとしていた。しかしそれは野蛮な奇襲攻撃に対する当然の報いだと冷ややかに見ている人もいる。こうした見方はパレスチナ人の長い受難の歴史を知らない、知ろうとしない人たちが抱きがちなものだ。民主国家を表向き標榜するが、実はシオニズムに基づいたアパルトヘイト体制で社会を維持するイスラエルの仮面を見抜けないということである。「ハマス−イスラエル戦争」とマスコミで報じられるニュースは欠陥だらけだ。真実は語られない。絨毯爆撃下で生きる人々の恐怖を思い、眠れない私の夜が続いた。

ハマスを中心とする統一戦線による奇襲攻撃直後、私はついに来たか、とてつもなく大胆な決断をしたものだ、と戸惑いながら、それを口実とした猛烈な反撃を予想し不安だった。パレスチナの武装勢力が襲撃したところはかつて彼らの親や祖父母たちが 1948 年のナクバ（大災厄）で暴力的に追放された故郷の地である。片道切符の特攻隊として、天に召されると信じて決起した彼らが、イスラエルが言うような神に咎められる非道行為をすることなどありえないのではないか。

1948 年の悲劇から失意と漂泊の時期を経て、祖国を取り戻そうと行動を始めて以来、“テロリスト”と呼ばれてきたパレスチナ人がどんな苦難の道を歩んできた人たちなのか、48 年以前はどういう暮らしをしていた人たちなのか、それには無関心なまま、民主主義に逆らうテロリストであると烙印を押されてきた。ときにはパレスチナという単語を発することすら禁じられ、はばかられてきた。「パレスチナ」は表立って使ってはならない隠語の扱いをされ、闇の中に閉じ込められてきた。だからこそ、パレスチナの一部であるガザの人々の素顔、やさしさ、ユーモア、不屈の魂、夢、苦悩を、美術作品を通して純粋に感じとってほしいと私は願ってきた。

死を覚悟するガザの人々

昨年末からガザ南部に避難した人たちは、冬の間もテント生活を強いられ、水も食糧も燃料もトイレもない不自由で不衛生な劣悪環境の中で身を寄せ合って暮らしている。人口の５パーセントの命が無残にも消されてしまったと知ったのはこの 4 月だった。それでも心折れない誇り高き人々である。個人的な親交を得ていたガザの画家たちの近況を SNS で見守り続けながら、無事を祈ることしかできなかった。通信も限られ、こちらからの物資支援

などできるはずもなく、無力感でいっぱいだった。「無事だよ」という一言の通信をやっと受け取ったときは、胸を撫でおろした。ガザの誰もが死を覚悟した瞬間がこれまで何度もあった。

常に死を覚悟していたガザの人間のひとりに詩人リファアト・アラリール（Refaat Alareer）氏がいる。彼は『私たちは数字ではない（We Are Not Numbers)』という団体を創設し、自らの尊厳と抵抗精神を示すとともに、世界とつながろうとしてきた人々のリーダー的な存在だったが、12 月、イスラエル軍に避難先を察知され殺害された。アラリール氏たちはSNS を利用して詩を発表し、世界に発信してきた。だから「敵」は彼をとくに目障りで危険な人物とみなし恐れたのである。それを 2008-９年の大規模なガザ侵攻の時から察知していたアラリール氏は、今回の侵攻開始以降も絶えず慎重に居場所を変えて過ごしていた。時にはオンラインのメディア（例えばElectronic Intifada）に躊躇せず出演して語り続けていた。

ガザの誰もが家族・親戚・隣人・友だちをたくさん殺されている。そのうえ軍事的戦略の一つと言われる「飢餓」の苦しみにも耐えている。まるで絶滅収容所である。

祈りに満ちて

絵画展に足を運んでくれた人たちは、展示作品をていねいに熱心に鑑賞してくれた。「すべての作品から、祈りを感じますね」と語ってくれた年配の人の一言に胸が震えた。そして若い男子高校生は「パレスチナの文化、その豊かさに驚いた」と感想を書き残していった。ナビル・アナーニ画伯の描いたパレスチナ女性の絵の前で号泣してしまった若い女性もいた。日本に住む若いパレスチナ人や南アの人など、留学生や外国人も多く来場した。聖母マリアが壁に囲まれたベツレヘムの壁の内側でイエスを抱いて母乳を与える姿と、壁の外側でそれを監視するイスラエル兵士たちを描いて占領の現実を描いたスレイマン・マンスールの絵はメキシコ人の若い美術史研究者を唸らせた。ギャラリーでの交流は暖かな雰囲気に包まれた。連日小雨の寒い日だったが、来場者は最終日まで途切れることがなかった。絵画展をサポートしてくれたギャラリー、そして友人たちには感謝の気持ちでいっぱいである。今は次の「ガザのためのポスター」展の準備、そして横浜でのパレスチナの絵画展「パレスチナの物語」（ギャラリーしみず、６月 19 日～２３日）の準備に追われている。

もし私が死ななければならないなら

リファアト・アラリール

もし私が死ななければならないなら
あなたは生きなければならない
私の物語（ストーリー）を語るために

私の遺品を売るために
一枚の布と　糸を買うために
（色は白にして、長い凧のしっぽをつけてくれ）

そうすれば、ガザのどこかにいる子どもが
天を見つめながら
炎の中に消え去ってしまった父親を
自身の肉体にも、魂にさえも
誰にも別れを告げることなく消えていった
父親を待っている子どもが
その凧、あなたが作った私の凧が
空高く舞っているのを見て
天使がそこに現れたと一瞬思うだろう
愛を取り戻してくれるだろう

もし私が死ななければならないなら
希望をもたらすものであってくれ
物語（テイル)になるものであってくれ

＊原題（英詩）は“If I must die“　訳・長沢美抄子

ガザの人たちは空を自由に飛ぶ鳥に憧れる。ガザの子らは凧揚げをして束の間の自由を味わう。それもギネス世界記録を打ち立てるほど凧揚げに熱中する。東北大震災の直後もガザの子どもたちは凧を上げて被災地の子どもたちに心からのエールを送った。ガザの人々は家屋が密集する小さな土地に押し込まれ、敵「国」が作った壁に囲まれて暮らし、外の世界から閉ざされたままである。外に飛び出すのは不可能に近く、思いっきり遊べる場所は限られている。海岸から沖に出ることもきびしく制限されている。

「数えないで」と叫ぶ

元高校教師の友人が教えてくれた短歌がある。朝日歌壇で注目された歌だと。

「数えないで　一万人の一人には　息子ハリドは私のすべて」（高山市・松井哲郎）

空爆で死んだハリドは一人の人間、数字ではない、と叫ぶ母の気持ちがこの歌には込められている。張り裂けるような悲痛な母の声、魂が詠まれている。今は亡き詩人アラリールが共同創設した『私たちは数字ではない』という団体名にもあるように、パレスチナの人々は強く訴える。数字で語らないでくれと。一人一人が尊厳を持つ人間であるという、抵抗の意思表示である。

アラリール氏が殺されたのは、昨年 12 月のこと。狙われていることを直前に知り、その日は妹家族の住むところに身を寄せた。ところが妹もその家族（夫も子どもたち）も全員巻き添えで殺された。アラリール氏は詩人で、ガザの大学で英文学、とくにシェークスピア文学などを教えていた。『我々は数字ではない』という詩人団体を率い、世界にガザの人たちの思いを伝えるために、英語で詩や短編小説を作れるようにと熱心に大学生を指導したことでも有名である。彼に薫陶を受け、海外で詩人や小説家となって活躍し始めている者も多い。3 月には NHK のニュース番組が彼のことを取材し報じた。ここに紹介した詩「もし私が死ななければならないなら」は 10 年ほど前に書いた代表的な、今はあまりにも有名な一篇である。故人には英語による編著が２冊ある。Alareer, Refaat, eds. *Gaza Writes Back: Short Stories from Young Writers in Gaza, Palestine* (2014), Alareer, Refaat+ El-Haddad, Laila, eds. *Gaza Unsilenced* (2015).

リファアト・アラリール氏

＊このエッセイは『詩人会議』２０２４年５月号掲載の「二〇二四年三月、祈りのパレスチナ絵画展」に加筆・修正したものである。